

遅れて登場した人種隔離論者： ジョージ・ウォレス再考

松 村 延 昭

Abstract

George Wallace was the Governor of Alabama, serving four terms from 1963 to 1987. He was an influential politician who also ran for the President of the United States four times. But he was best known for taking a political position opposing that of the President John F. Kennedy and his Attorney General, Robert Kennedy and Martin Luther King, Jr., and trying to maintain the policy of segregation. In his gubernatorial inauguration speech of 1963, he declared, “I say . . . segregation today . . . segregation tomorrow . . . segregation forever” and received enthusiastic applause from the Alabama audience. However, those who live in the other parts of the United States have often criticized him as a racist and a populist.

In this paper, by classifying the reasons for his persistent adherence to segregation into two categories, constitutional and emotional, I analyzed his thought and behavior, because it seems worth considering his opinion once again, not simply regarding it as meaningless remarks of a racist. Though it is obvious that racial discrimination should be abolished, it is not easily eliminated by simply claiming it is wicked. To achieve the end, it is also important to listen to and understand the voice of those who were called segregationists.

アメリカ南部のロック・グループ、レナード・スキナード (Lynyrd Skynyrd) が1974年のヒット曲、「スイート・ホーム・アラバマ」 (“Sweet Home Alabama”) を演奏するとき、舞台の背景には巨大な南部連邦 (the Confederate States of America) の国旗が掲げられていた。¹『フォレスト・ガンブ』 (*Forrest Gump*) などのサウンドトラックにも用いられた軽快な

リズムをもつ曲であるが、その歌詞は社会的物議を醸し出した。

Well, I heard Mister Young sing about her
 Well, I heard ole Neil put her down.
 Well, I hope Neil Young will remember
 A southern man don't need him around anyhow.

と歌われる her はアメリカ南部であり、ニール・ヤング (Neil Young) はカナダ出身の歌手である。²南部人は彼が側にいてほしくないと言いつ節は、ヤングが1970年と1972年にリリースした、「サザンマン」(“Southern Man”)と「アラバマ」(“Alabama”)に対する回答の意味をもつ。「サザンマン」でヤングは、

I saw cotton and I saw black.
 Tall white mansions and little shacks
 Southern man, when will you pay them back.
 I heard screaming
 And bullwhips cracking

と南部の人種差別に塗れた歴史を手厳しく批判している。さらに「アラバマ」では、

Oh Alabama
 Can I see you and shake your hand
 Make friends down in Alabama

と歌い、アラバマ州の住民は人間として交わりを結ぶに足る相手であるのか、と疑問を呈している。そのようなヤングの南部社会への強い抗議のメッセージに答えるアンサーソングとして、レナード・スキナードは「スイート・ホー

ム・アラバマ」をリリースしたのである。

メンバーでこの曲を作詞したロニー・ヴァン・ザントは、1976年にイギリス人記者のインタビューに答えて、“But we just felt like he [Young] was shooting all of the dogs because some had the flu” (Kemp 92) と語り、狭量な一部南部人と大多数の南部人を混同する誤りを指摘したり、あの歌詞はジョークであったと弁明をしたりしているが、曲のヒットとは裏腹に、レナード・スキナードは南部の無知な労働者階級を代表する人種差別的なバンドであると汚名を着せられることになる。一方、南北戦争以来、南部の実情を理解することなく空疎な理想ばかり押しつけてくる連邦政府に対する反発の一環として、自分たちの感情を代弁してくれる歌、「スイート・ホーム・アラバマ」はアラバマを中心とした南部社会で絶大な人気を博することとなった。以下の一節も南部人の本音として受け止められている。

In Birmingham they love the governor
Now we all did what we could do
Now Watergate does not bother me
Does your conscience bother you?

1970年代のアメリカには、ベトナムへの介入と撤退による虚無感、ウォーターゲート事件による国家に対する不信感が充満していた。国民全体が自信を喪失したアメリカ社会で、ウォーターゲート事件を矮小化し、よそ者が何と言おうと自分たちは自分たちの知事を支持していた、南部に居住するアメリカ人として誇りをもち生きていこう、というメッセージは多くの南部人の耳に心地よく響いた。

ここで言及されている知事が、1963年から1987年の間にアラバマ州知事を4期務め、大統領予備選挙にも4度出馬し、南部のポピュリスト、人種統合政策反対論者として様々な意味で世間を騒がせたジョージ・ウォレス (George Corley Wallace, Jr.) である。彼が知事に初当選した1963年は、キング牧

師 (Martin Luther King, Jr.) がワシントン D. C. のリンカン・メモリアル前で「わたしには夢がある」のスピーチを行い、翌1964年には公民権法が成立する、公民権運動も最終局面にあった。世の中の大勢は人種隔離政策廃止へと向かい、人種隔離論を唱える者は漸進主義を取る以外に術はなかった時期である。それにもかかわらず就任演説でウォレスは、“I say . . . segregation today . . . segregation tomorrow . . . segregation forever” と声高に叫び聴衆の賞賛を受けている。本論では、最後の有力人種隔離論者であったジョージ・ウォレスの行動と思想を検討することにより、ポピュリストの人種差別主義者というレッテルを貼られた彼の主張を再考することを目的とする。

I

アラバマ州のタスカルーサ (Tuscaloosa) にある当時学生は白人のみであったアラバマ大学に、アフリカ系アメリカ人のビビアン・マローン (Vivian Malone) とジェイムズ・フッド (James Hood) が入学を希望した。³ 就任直後の1963年6月にウォレスの名を全国的に知らせたのは、入学手続きをするためにやってきた二人を、彼がフォスター講堂の入り口に立ち阻止しようとした事件である。ケネディ大統領がアラバマ州兵を連邦政府の管轄とする緊迫した状況下で、二人の入学を許可するように連邦最高裁判所令を伝える司法次官、ニコラス・カツェンバック (Nicholas Katzenbach) に対して、“I . . . hereby denounce and forbid this illegal and unwarranted action by the central government” (Clark 226) と宣言する約5分間のスピーチの後、彼は扉への道をあけ、最終的に二人は入学することになる。カツェンバックたちが去った後にも、ウォレスは地元記者を呼び、

I am not against any person, white or black. I only seek to raise constitutional questions and to take some action which

might call the nation's attention to the encroachments of the federal government. (Lesher 232)

と、自分はいくまで“constitutional fight” (Lesher 233) をしているのだと主張している。テレビで全国中継された言動により、彼は人種隔離主義の象徴的存在となり、公民権運動を推進しようとするケネディ兄弟とキング牧師共通の敵として広く社会に認知されることになる。

このスピーチにあるように、ウォレスにとって連邦政府が二人の入学を強制することは、“a frightful example of oppression of the rights, privileges, and sovereignty of this state by officers of the federal government” (Lesher 229) となるのである。二人の入学を認める最高裁判所の決定を履行しようとする、当時司法長官であったロバート・ケネディ (Robert Kennedy) は同年4月のウォレスとの対話で、

I think it [an oath under the Constitution] transcends . . . the question of segregation or integration or anything like that. I think it just goes to the integrity of our whole system. (Clark 182)

とアメリカ国民としての憲法遵守義務を説くのであるが、ウォレスは逆に憲法修正11条を楯に取り自己の正当性を主張する。憲法修正11条は、一州に対する他州の市民などにより起こされた訴訟に連邦政府の司法権は及ばないとしており、ウォレスは州の主権が連邦政府により侵害されてはならないと主張する。連邦政府の権限と州政府の権限が及ぶ範囲に関しては、憲法制定時から現在に至るまで論争が続いている。奴隷制度を廃止する憲法修正13条の後に批准された憲法修正14条は、解放されたアフリカ系アメリカ人の明確な保護を目的としており、アメリカで生まれたか帰化した人はすべてアメリカの市民であり市民としての権利を有するとしている。アフリカ系アメリカ人

の地位と権利を保障しようとする修正条項であったが、適用範囲と解釈の相違が後の最高裁判所の異なった判決を生み出すことになり、ケネディやウォレスの憲法論議へとつらなっていく。⁴

キング牧師は「私には夢がある」のスピーチで以下のように語っている。

I have a dream that one day, down in Alabama, with its vicious racists, with its governor having his lips dripping with the words of “interposition” and “nullification” — one day right there in Alabama little black boys and black girls will be able to join hands with little white boys and white girls as sisters and brothers. (Haskins 79)

“its governor”はウォレスのことを指す。その知事が唱えている“interposition”とは、各州が主権を守り連邦政府の措置に反対することが可能だとする州権優位説であり、“nullification”とは、憲法上の理由により州が連邦法の実施を拒否できるという考え方である。キング牧師は、州権優位説をひたすら唱えて自己を正当化する差別主義者という強い表現でもってウォレスを非難しているのであるが、彼にとってはアフリカ系アメリカ人の白人学校への入学強制こそが違法なのである。

ウォレスは「プレッシー対ファーガソン裁判」に言及することが多い。南部の人種隔離政策に根拠を与えたのは「プレッシー対ファーガソン裁判」における判決であった。南北戦争が南部連邦の敗北に終わった1865年から1877年までの「南部再建期」には、北部の軍隊が南部に留まっていた。しかし、1878年以降、南部諸州はアフリカ系アメリカ人が白人と同じ公共施設を使用することを禁じる、各種のジム・クロウ法を制定する。1892年ルイジアナ州で、8分の1アフリカ系アメリカ人の血をもつオクトルーン (octoroon) であったホーマー・プレッシー (Homer Plessy) は、ジム・クロウ法に異議を唱えるため意図的に白人車両に乗り逮捕される。プレッシーを担当した

ルイジアナ州の裁判官ファーガソン (John Howard Ferguson) は、後に有名になる「分離すれど平等」という言葉でもって、ジム・クロウ法を是認した。即ち、兩人種に同等の施設が保証されるのなら、施設が人種間で分離していようと平等の原則に抵触することはないと判断したのである。この事案は1896年に連邦政府の最高裁まで控訴されるが判決は変わることなく、「分離すれど平等」の原則は南部社会で定着した。1963年『ニューヨーク・タイムズ』誌の記者たちを前にしたウォレスは、

Plessy versus Ferguson many years ago was decided in favor of the separate-but-equal-facility doctrine, but constant efforts by those who opposed this interpretation resulted in the Brown case, so I see no reason why we should not continue to raise questions, and the court might decide to change its mind as it did in the Brown case.⁵ (Leshner 209)

と語り、公民権運動の先行きも不確定なものだとしている。

このように州権優位説を唱え憲法論を展開し人種統合に反対するのはウォレスに始まったことではない。古くは1830年代に、サウスカロライナ州が連邦政府の関税制度に州権優位を唱えて抵抗している。「ブラウン対教育委員会裁判」における画期的な最高裁判決の後にも、南部出身の96人の国会議員が「南部宣言」を発表する。彼らは、学校における人種統合を強制する最高裁の判決はあきらかに司法権の乱用であり、憲法に反するこの決定を覆すためにあらゆる法的手段を用いると宣言している。また、1957年アーカンソー州リトルロック (Little Rock) ではエリザベス・エクフォード (Elizabeth Eckford) ら9人のアフリカ系アメリカ人の生徒が白人のみのセントラル高校への入学を、オクスフォード (Oxford) にある白人専用のミシシッピ大学へは、1962年にアフリカ系アメリカ人の退役軍人、ジェイムズ・メレディス (James Meredith) が入学を希望している。アーカンソーのフォーバス

(Orval Eugene Faubus)、ミシシッピのバーネット (Ross Robert Barnett) 両知事は共に州権優位説を唱えることにより強固に反対するが、結局上記のアフリカ系アメリカ人たちは入学することになった。⁶

さらに言えば、「分離すれど平等」の「平等」には疑問符がつく。20世紀当初のミシシッピ州では、学校に通う生徒の60パーセントがアフリカ系アメリカ人であったのに、その学校に与えられた予算は全体の19パーセントでしかなかった。アフリカ系アメリカ人のスエット (Heman Marion Sweatt) がテキサス大学のロースクールへ入学を希望し、学長のペインター (Theophilus Painter) と「スエット対ペインター裁判」で争った折には、テキサス州がアフリカ系アメリカ人専用のロースクールまで設けて入学を阻止しようとした。しかし1950年に最高裁判所は、立派な施設や十分な蔵書をもつ図書館、優秀な教授陣を有する白人のロースクールと比べて、アフリカ系アメリカ人のものは明らかに劣等であるとし、スエットの入学を認める裁定を下した。ウォレスの唱える「分離すれど平等」は、もはや実態を伴わない言説であったと言える。

古典的ともいえる理論を振りかざして、ウォレスはなぜ社会の流れに逆らったのだろうか。彼が最も強調するのは私人の権利、即ち個人のもつ嗜好の自由である。学びたい環境で学ぶ権利、自由はアフリカ系アメリカ人にもあるが、同時に南部白人にもある。マローンやフッドたちは、「全米有色人向上協会」が人種隔離政策に風穴を開けるために厳選した模範学生であったが、感情を抑えることができず本能のままに行動しがちだと考えられていたアフリカ系アメリカ人が入学すると、従来の学習環境は失われ、学生の安全は脅かされると考える者が南部社会には多くいた。ウォレスは連邦政府が強制しているのは、“whom you can eat with and whom you can sit down with and swim with and whom you can sell your house to” (Leshner 210) であり、自分たちは理不尽な要求をしているのではなく、一方の自由を求めているのだとする。

公共のカフェテリアで料理を手に気の合う仲間のいるテーブルにつくのは自然な行為であるが、好ましくない者が自分たちのテーブルへ座るのを阻止するのは、法的根拠のない行為である。ましてや、そのテーブルには座り心地の良い椅子があり、大きな窓からは素晴らしい景観が見渡せるのなら、そのテーブルにつく者たちは他のテーブルと比べてより快適な空間を享受していると言える。彼らはそこに異質な者が混じり自分たちの快適さが損なわれることを必死で避けようとする。しかし、自分が望む教育を求めて来た者を、好悪の主観でもって阻むことは許されることではない。

しかし、自分にとって肌の合わない者が自分のテーブルの空席にきたなら席を立つ自由はある。この場合は人としての礼節を欠くことになるかもしれないが、それが法律に違反しているとは言い難い。好ましくない生徒、学生の入学を嫌い全生徒、全学生が学校を去るのは理論的には可能であるが、当然のことながら、それはあまりにも現実から乖離した解決法である。しかし、気の置けない仲間たちとの調和のとれた空間を乱されたくないという思いも、そこに個人の自由が関わる限り、利己的だとして一方的に否定することはできないであろう。

ここでジェンダーによる別学の問題に目を移してみよう。男子のみ、女子のみの環境で異性の存在を気にすることなく学びたいと希望する者もあり、彼／彼女たちは一方の性のみの大学を選択する。しかし、某大学のカリキュラムで学びたい、某教授の講義を受けたいという希望は、人種の差異と同様に、ジェンダーの差異によっても妨げられてはならないだろう。事実、1990年代にいくつかの男子専用のミリタリー・スクールへ女子が入学を希望し、司法令により何人かの女性の入学が学校側に強制された。現在では、女子大学も部分的に男子入学を許可したり、男女共学化されるケースが増えつつある。しかし、モノセックスの教育に価値を見いだす者にとって、彼／彼女の自由は妨げられることになる。

1964年の中西部への遊説でウォレスは、“These same government

officials who are trying to take over my school system have fled to Virginia or Maryland or put their children in private schools”

(Leshner 270) と、ワシントン DC の連邦政府高官は偽善的だと語っている。現に公民権法成立後にも、近隣の学校が人種共学となるのを厭い、白人のみの環境で我が子を学ばせようとする親たちが私立の学校へと子どもを転校させた例は数多くある。⁷ このケースは公立の学校とは異なり、公共の場を離れたと考えることができるかもしれないが、広義に解釈すれば、私立学校も公共性を帯びた施設である。翻って考えてみると、修学環境の完璧な平等が達成されるなら、キング牧師が思い描いた理想の人種関係とは程遠いものの、人種・男女別学は許容されるのであろうか。

我が国の公共交通機関の多くは女性専用車両を設けている。男性すべてが女性を害するとは言えないまでも、性衝動を抑制することのできない卑しい男性のいる可能性がある限り、そこで女性が安心して過ごすことはできない。故に、電鉄会社は女性が安心して通勤・通学できる快適な空間を提供しているわけである。ウォレスも黒人がすべて不道徳で野獣のような人種であるとは言わないが、周囲がそのように考え不安を抱く故に、学園の静謐と平穏を守るために学校の人種統合に反対すると言う。当然のことながら、当時の人種隔離政策の核にあったのは、アフリカ系アメリカ人を自分たちより劣った人種とみなす白人のエゴイズムである。しかし、一方の自由は他方の自由を侵すという根元的問題を視野にいれるなら、ウォレスを単なる差別主義者とレッテルを貼って葬り去ることもできないのではないだろうか。

II

ウォレスに代表される南部人が人種隔離政策に固執した最大の理由は、南部と北部の文化的差異から生まれる感情的しこりである。痩せた土地と寒さの厳しい北部は、農業に適さないだけに工業化した産業社会へと脱皮し発展していく。一方、気候が温暖で肥沃な土地をもつ南部は、綿花、トウモロコ

シ、タバコなどを大農場で栽培し、農業を基幹産業としていった。経済形態の相違は、アメリカを自由州と奴隷州が入り交じった複雑な連邦国家とし、二つの地域を敵対関係に陥らせた。とりわけ、経済が奴隷労働に依存する南部は、人道的理由から奴隷廃止を訴える北部を偽善的として非難していた。結果、敵対関係は未曾有の戦死者数をアメリカにもたらした南北戦争を勃発させるに至った。

1936年に出版された、マーガレット・ミッチェル (Margaret Mitchell) の『風と共に去りぬ』 (*Gone with the Wind*) は、南北戦争前後の南部社会を華麗に描くヒストリカル・ロマンスとして有名である。激変する南部社会を逞しく生きるヒロイン、スカーレット・オハラ (Scarlett O'Hara) の恋愛に注目が集まるのであるが、人種差別的な小説だとも言われている。⁸「南部再建期」にスカーレットと親しくなった北部のメイン州からきた女性が子どもの世話をする乳母を捜していると言うと、スカーレットはすかさず、地方から出てきたアフリカ系アメリカ人の女性を雇えば良いと勧める。しかしメイン州の女性は、“Do you think I'd trust my babies to a black nigger?” (671) と一蹴する。スカーレットは冷笑的に、“It's strange you should feel that way when it was you all who freed them” (672) と答える。『風と共に去りぬ』は南部白人が自分たちにとって理想的な人種関係を都合良く描いている、と頻繁に指摘されるのだが、サウス・カロライナ州の大農園主であり有力な南部政治家であった夫をもつメアリー・チェスナット (Mary Boykin Chesnut) も『ディキシシーからの日記』 (*A Diary from Dixie*) で、

The best way to take Negroes to your heart is to get as far away from them as possible. . . . People can't love things dirty, ugly, and repulsive, simply because they ought to do so, but they can be good to them at a distance; that's easy. (199-200)

と北部人のアフリカ系アメリカ人観は無知から生まれる思いこみである、とあからさまに批判している。農園主と女奴隷との性的関係に憤っていたチェスナットは、アフリカ系アメリカ人のことをより現実的で辛辣に表現しているのだが、ミッチェルと同様に、北部人は現実のアフリカ系アメリカ人の実態を理解していないと考えている。

ウォレスは1919年にアラバマの貧農の長男として生まれ、1930年代に害虫と不況により荒廃した南部社会の底辺で成長した。アフリカ系アメリカ人を身近に成長した彼には、自分はよそ者よりはるかにアフリカ系アメリカ人のことを知っているという自負がある。それだからこそ、時代を問わず現状を理解することなく空論を押しつけてくる、ケネディ兄弟に代表されるリベラルな思想をもつ東部のエリートたちに対する彼の憎悪は大きかった。彼がセルフメイド・マンとして地方判事から知事へと上り詰めていく中、彼がアフリカ系アメリカ人に好意的に接したエピソードは数多い。1958年にアラバマ州の超保守的な町、セルマ (Selma) で唯一のアフリカ系アメリカ人弁護士であり、後に公民権運動を推進する J・L・チェスナット・ジュニア (J. L. Chestnut, Jr.) は、“George Wallace was the first judge to call me ‘mister’ in a courtroom” (Leshner 95) と証言している。ウォレスの後の人種の立場を考えると異例とも思えるが、他にも彼が判事としてアフリカ系アメリカ人に寛容であり公正に対応した例は数多くある。

また彼は、“segregation would benefit both races” (161) であると、両人種にとって人種隔離政策は益をもたらしていると持論を述べる。アフリカ系アメリカ人の商店が成り立ち、アフリカ系アメリカ人が職につけるのは、人種隔離が行われているからであり、人種融合が成されれば、アフリカ系アメリカ人はビジネスにおいて淘汰されてしまうとしている。南部社会であまねく行き渡った考え方、“Northerners ‘love the Negro race’ but despise its individual members, whereas Southerners feel just the opposite” (Leshner 93-94) をウォレスは堅持していた。ミッチェル、メアリー・チェ

スナット、ウォレスは各々立場は違っていたが、三人とも、北部人が著しくアフリカ系アメリカ人に対する理解に欠けておりながら、自分たちの理想を押しつけてくることに憤る南部人としての共通点をもっている。

このように、ウォレスはアフリカ系アメリカ人のことを真に愛していると言うのであるが、その愛はアフリカ系アメリカ人が白人に隷属していることが前提である。『風と共に去りぬ』で、スカーレットの母、エレン (Ellen) は病気の奴隷を夜を徹して看病するなど、アフリカ系アメリカ人に対しても優しく接する落ち着いたサザンレディであるが、娘に以下の忠告をする。

“Always remember, dear,” Ellen had said, “you are responsible for the moral as well as the physical welfare of the darkies God has intrusted to your care. You must realize that they are like children and must be guarded from themselves like children, and you must always set them a good example.”

(472-73)

エレンはアフリカ系アメリカ人を愛情をもって扱うのであるが、同時に、保護者として精神的に未熟な者たちを教え導く責務を娘に諭している。娘であるスカーレットも、解放後も彼女の農園に居残り献身的に働くポーク (Pork) に言及して、アフリカ系アメリカ人は愚かで怠惰であるが主人に対する忠誠心は金では買えないと語っており、アフリカ系アメリカ人を自分たちと対等の者とは露程も考えていない。100年以上も前の世界を舞台とした小説に描かれている、アフリカ系アメリカ人は劣等であるという思い込みを、ウォレスが20世紀半ばを過ぎてまで抱いていたことの方が奇妙であるかもしれないが、その認識は南部白人の意識には根強く残存していた。

しかし、マローンたち優秀なアフリカ系アメリカ人の登場により、彼らが生物学的に劣等だという偏見は除去されつつあった。ウォレスも、“The blacks were not as capable because of a lack of education” (Leshner

161) と認めている。彼は自らの方向を漸進主義へと舵取って行く。アフリカ系アメリカ人を白人と同等に扱うのはまだ危険である、段階を追い時間をかけて教育を与えていくべきであり、急激な人種統合政策は社会を混乱に陥れる、と主張するのである。確かに、漸進的に人種統合を目指すのは、ウォレスの人種隔離をできるだけ長く維持しようとする戦略でもあったが、彼にとってはコミュニティの秩序を守るための“a moral issue” (Clark 184) でもあった。“I was safer in a B-29 bomber over Japan during the war in an air raid, than the people of Washington are walking to the White House neighborhood” とウォレスは1963年の就任演説で述べているが、これは彼の好む喩えである。⁹余計なお世話だ、と政府の干渉の不当性を指摘しているのであるが、同時に、治安の乱れを防ぐことを目的に公民権運動の性急さを衝いているのである。

しかし、漸進的に人種融合を目指すのは、日々の苦難に直面するアフリカ系アメリカ人にとっては事態先延ばしを計る詭弁でしかない。キング牧師は、340年以上の間、与えられるべき権利が与えられるのを待ち続けた当事者である自分たちに、“who paternalistically believes he can set the timetable for another man’s freedom . . .” (Haskins 68) と問いかけている。キング牧師は「私には夢がある」でも、“This is no time to engage in the luxury of cooling off or to take the tranquilizing drug of gradualism” と強い言葉でもち漸進主義を唱える者たちに怒りを隠さないのであるが、南部白人の多くは、まだ漸進的な人種統合を望んでいた。

ノーベル文学賞を受賞したミシシッピ州オックスフォード出身の小説家、ウィリアム・フォークナー (William Faulkner) は1950年に授賞式のスピーチで、“love and honor and pity and pride and compassion and sacrifice” (Faulkner 120) という普遍的真実のみをもって人間の心を描くことが小説家の使命であると説いている。このように、同じ南部人でも労働

者階級の代表であり差別主義者とレッテルを貼られることの多いウォレスとは違い、フォークナーは公民権運動時代のリベラルな南部白人のスポークスマンの人物だと考えられていた。彼は『エボニー』(*Ebony*)誌に発表した「黒人の指導者たちに宛てた手紙」(“A Letter to the Leaders in the Negro Race”)の中で公民権運動の指導者たちへ、あなたたちは300年も忍耐強く待ったのだから、“Go slow now. Stop now for a time, a moment. You have the power now; you can afford to withhold for a moment the use of it as a force” (Faulkner 107) と語っている。そしてもし自分がアフリカ系アメリカ人であったなら、

The white man has not taught us that. . . . Our leaders must teach us that. We as a race must lift ourselves by our own bootstraps to where we are competent for the responsibilities of equality, so that we can hold on to it when we get it.

(Faulkner 112)

と慎重な姿勢を示している。“Southern blacks would not be ‘ready’ for integration until they had received more and better education . . .”

(Leshner 97) と語ったウォレスと同様に、フォークナーも漸進的人種融合を勧めている。

さらにフォークナーは、アフリカ系アメリカ人のオーサリン・ルーシーがアラバマ大学へ入学するのを反対したのであるが、それはルーシーの死という汚点を被ることからアメリカを救う企てであったと語り、南部以外のアメリカは南部を理解していない主張している。彼はまた、自分の乳母であったキャロライン・バー (Caroline Barr) への追悼文で、“She transferred to my father’s family the wealth of a devotion and loyalty whose match I have never seen” (Welling 530) と、いかにアフリカ系アメリカ人であった乳母と心の交流があったかを述べ、血縁関係のない彼女が自分

たち家族にいかにか献身し愛情を注いだかを褒め称えているが、フォークナーの語る彼とバーとの関係は、『風と共に去りぬ』におけるスカーレットとマミー (Mammy) の関係と酷似している。人類相互の愛と思いやりを説き、南部社会の過去の罪を意識的に描くフォークナーであっても、ミッチェルと南部人としての共通意識を抱いていたことがわかる。自分の背後には、“a dark silent, brooding mass of people” (Leshner 235) がついている、とウォレスが考えたのも無理がなかったのかもしれない。

ウォレスの存在を時代遅れの人種差別主義者の悪と捉えるのは容易であるが、彼が自分の背後にいる多くの南部白人の意識を包み隠さずに表明したことも事実である。1964年の公民権法成立以降も、南部各地で人種問題に由る暴力事件は頻発している。ウォレスの率直な言説はそれらの暴力を助長したとも考えられるが、一方で彼の存在がなければ、自分たちは抑制され続けていると考えた南部人の不満が潜在化し、さらなる暴力が生み出されていた可能性もある。前述のレナード・スキナードが “In Birmingham they love the governor” と反発心と本音を顕わにするように、彼の背後には多数の南部人がいた。彼らの意識を歯に衣着せぬ言葉でもって表明したスポークスマンとしての彼の言動は確かに時代に逆流するものであったが、蓄積した不満のマグマを放出するための一定の役割は果たしたのではないだろうか。

ウォレスは差別主義者であり大衆迎合主義の政治家であったと結論づけられることが多い。確かに、アラバマ州知事を4期務めたのであるが、3期目の1978年には、かつてキング牧師が赴任し、そこからバスボイコットを指導したアラバマ州モントゴメリーのデクスター通りバプテスト教会を訪ね、“I regret my support of segregation and the pain it caused the black people of our state and nation” (Leshner 502) と、アフリカ系アメリカ人の聴衆の前に悔悟の念を表している。同時に、大統領予備選挙に出馬し、メリーランド州で遊説中に銃撃をうけ下半身不随となり車いす生活を余儀な

くされていたウォレスは、“I’ve learned what pain is and I’m sorry if I’ve caused anybody else pain. Segregation was wrong — and I am sorry” (Leshner 502)、と自らの非を率直に認め謝罪している。1983年からの4期目を務めることができたのは、彼に投じられた票の3分の1が、アフリカ系アメリカ人の支持者による票であったからである。政治的理念より権力に就くことを優先し、人種隔離政策を執ることもあれば、逆にアフリカ系アメリカ人に阿ることもある、と世間一般に受け取られるのが彼がポピュリストのレッテルを貼られる所以である。

しかし、彼が南部社会のために良かれと思い行動したことも否定できない。新たな企業を誘致し職を増やすことが、“the most important thing you can do for the Negro people” (Leshner 184) と考え、アフリカ系アメリカ人の生活水準を高めようと積極的に策を講じている。贖いを求めるウォレスに対して、1982年の知事選で彼を支援したアフリカ系アメリカ人の女性は、“He had made some mistakes. But haven’t we all? You have to understand, the races are more bold and honest with each other in the South” (Leshner 501)と述べているし、キング牧師の妻、コレッタ (Coretta King) やジェシー・ジャクソン (Jesse Jackson) などアフリカ系アメリカ人の名士たちも彼のことを許すと公言している。彼は良きにつけ悪きにつけ偽りのない人物であった。彼の単純明快な行動により人種差別の膿が排出され、1980年代初頭に人種問題が噴出していた全米の各都市と比して、当時の南部社会は人種和解の目標へより近づいた地域となっていたという意見もある。¹⁰

南北戦争以降も南部社会が行ってきたことは、人種隔離というレトリックを用いてはいたものの、実質的には人種差別であった。現代においてすら、アメリカ社会に残る感情面での差別意識が皆無であるとは言えない。人種差別は許されることではない、というのは自明の理であるが、それを声高に主張するだけで消え去るものでもない。換言すれば、人種差別はいけな

言でもって集約し、複雑に入り組んだ諸事情を簡略化してしまうことにこそ問題があるのではないだろうか。差別する側の考えにも耳を傾け理解を深めていく、そのことにより差別のメカニズムは始めて全容を表し、解決への前進もある。その意味で、キング牧師たち公民権運動の活動家の考えを知るとともに、ウォレスという単純明快な南部人の声に耳を傾けることにも意義はあると思われる。

本稿は、2009年度同志社女子大学研究助成金（個人研究）による成果の一部である。

注

- 1 レナード・スキナードは1970年代前半に活発に活動した南部のロックバンドであったが、1977年にツアーで移動中のチャーター機が墜落したことにより、ロニー・ヴァン・ザント (Ronnie Van Zant) を含む3人のメンバーを失った。彼らは南北戦争時代の南部連合国旗をはためかせて、南部人のサザンロックを強調するステージを演出した。
- 2 ニール・ヤングはスティーブ・スティルス (Stephen Stills) らと CSN&Y を結成し、1969年にニューヨーク市郊外で開かれた大野外ロックフェスティバル、「ウッドストック」にも出演した70年代を代表するロックスターである。最近ではバンクーバーオリンピックの閉会式でも演奏した。
- 3 二人は、自分たちアフリカ系アメリカ人の大学にはない課程を、アラバマ大学で学習することを望んだ。アラバマ大学はアフリカ系アメリカ人の入学希望者にのみ、以前所属していた学校の調査書を詳細に審査したり、追加の学力テストを課したが、二人はそれらの条件を満たしていた。また、アラバマ大学へは、アフリカ系アメリカ人として始めて、オーソライン・ルーシー (Autherine Lucy) が1956年に入学を希望した。彼女は「全米有色人向上協会」(“the National Association for the Advancement of Colored People”) の協力を得て入学を果たすが、3日目に彼女の入学に不満を抱く暴徒が集会をもち警察が招集されると、危機感を抱いた大学当局は安全な環境保持を理由にルーシーを停学にし、結局彼女は大学に戻ることなく退学した。
- 4 この修正条項は、州に対して法の下での平等を保証するように求めているため、連邦政府は州を越えて直接個人の事項に口だしすることが難しくなったとも言える。

- 5 1951年にカンザス州に住む溶接工、ブラウン (Oliver L. Brown) は、娘がスクールバスを利用しなければならない遠いアフリカ系アメリカ人の学校から、歩いて通学できる白人専用の学校へ通えるようにとトピーカ (Topeka) 教育委員会を訴える。1954年に連邦最高裁は、人種により隔離された公立学校は憲法に違反すると判決をくだした。
- 6 オックスフォードの場合、ケネディ大統領は軍隊の出動を要請し、メレディスの入学を阻止しようとする暴徒の鎮圧にあたった。二人の死者までだした争乱は「オックスフォードの戦い」(“the Battle of Oxford”) と称され、ボブ・ディラン (Bob Dylan) の抗議の歌「オックスフォードの町」(“Oxford Town”) の中でも歌われている。
- 7 デトロイトなど北部の都市でも、学校での人種統合を避けるために、市街地から郊外へ多くの白人家庭が移り住んだ。この現象は「白人の大移動」(“white flight”) と称されている。
- 8 白人に従順で、奴隷解放前の時代に戻りたいといった発言をするアフリカ系アメリカ人が登場するなど、南部白人のこうあってほしいと抱く世界観により描かれた物語だとして批判も多い。現在は博物館となっているミッチェルの住んだ家が2度放火されたのも、作家に対する反発の表れだと考えられている。
- 9 1943年にウォレスは陸軍航空隊に入隊し、1945年にはB-29に搭乗して日本の本土爆撃に従事した。
- 10 1980年代初めに、東ロサンゼルスでは人種対立が暴動へと発展し、ウィスコンシン州では白人の親たちが、人種的バランスをとるためのバスでの強制通学に強行に反対するなどしていた。レッシュャーはそれらの事実を鑑み、ウォレスを部分的にはあるが評価している (Leshner 504)。

引用・参考文献

- Chesnut, Mary Boykin. *A Diary From Dixie*. Boston: Houghton, 1949.
- Clark, E. Culpepper. *The Schoolhouse Door: Segregation's Last Stand at the University of Alabama*. New York: Oxford U P, 1993.
- Faulkner, William. ed. James B. Meriwether. *Essays, Speeches & Public Letters by William Faulkner*. New York: Random, 1965.
- Haskins, Jim. *I Have a Dream: The Life and Words of Martin Luther King, Jr.* Brookfield: Millbrook Press, 1992.
- Kemp, Mark. *Dixie Lullaby: A Story of Music, Race, and New Beginnings in a New South*. New York: Free Press, 2004.
- Leshner, Stephan. *George Wallace: American Populist*. Cambridge: Perseus

Publishing, 1994.

Mitchell, Margaret. *Gone with the Wind*. New York: Scribner's, 1936.

参考文献

Beck, John et al. *Southern Culture: An Introduction*. Durham: Carolina Academic Press, 2007.

Cobb, James C. *Away Down South: A History of Southern Identity*. New York: Oxford UP, 2005.

Gaillard, Frye. *Alabama's Civil Rights Trail: An Illustrated Guide to the Cradle of Freedom*. Tuscaloosa: U of Alabama Press, 2010.

Odom, Gene et al. *Lynyrd Skynyrd: Remembering the Free Birds of Southern Rock*. New York: Broadway Books, 2002.

Rogan, John. *Neil Young: The Definitive Story of his Musical Career*. New York: Proteus Books, 1982.

Welling, Bart H. "In Praise of the Black Mother: An Unpublished Faulkner Letter on 'Mammy' Caroline Barr." *The Georgia Review* 55 (2001): 536-42.

阿川尚之『憲法で読むアメリカ史』上・下 東京：PHP 研究所、2004年。

バーダマン、ジェームス・M『黒人差別とアメリカ公民権運動：名もなき人々の戦いの記録』水谷八也訳、東京：集英社、2007年。

ムーディ、アン『貧困と怒りのアメリカ南部：公民権運動への25年』樋口映美訳、東京：彩流社、2008年。

Alabama Department of Archives and History. "The 1963 Inaugural Address of Governor George C. Wallace." [Online] Available http://www.archives.state.al.us/govs_list/inauguralspeech.html, March 28, 2011.

Thrasher's Wheat org. Lynyrd Skynyrd and Neil Young. [Online] Available <http://thrasherswheat.org/jammin/lynyrd.htm>, March 25, 2011.